

# ◎子育て・学校教育を取り巻く現状と今後の方向性

■汐見稔幸

## 1 教育問題の社会的背景

### ①画一的な「成功する人生イメージ」への過度の集中

現在の教育に関する諸問題の原因・背景をどこに求めるか、人によって見解・評価は様々である。私は、本来、多様であるはずの

子どもの進路や成長過程が、戦後の日本の場合、強固に狭められ、そこに過剰な競争を生みだしてしまっただけで、大きな原因だと考えている。山登りに例えれば、本来、登山道はたくさんあるのに、一本か二本しかないと考え、一番早く着ける道や景色の良い道ばかりに人が集中しようとするのである。さらに、たとえその競争に勝っても、必ずしも幸せな人生が保証されないという現実が、バブル経済の崩壊以降、終身雇用制の見直しなどによって顕在化した。そのため、これが先行きの不透明感・不安感が増長し、育児や教育不安を拡大している。

そもそも、資本主義社会とは、多様性とともに一種のアン・キズムを持った社会であ

る。職業選択においても、自由度は高いが、同時に、的確な選択をすることは、たいへん難しい。本来、社会は子どもに多様な人生の選択肢を用意し、親は子どもの適性を早めに見極める必要がある。

一九六〇年代から、日本で極めて画一的で特殊な「成功する人生イメージ」への過度な競争が起きてしまったのは、親がそこへ子どもを追いやって行く方が、適性を見極めるよりも楽だったからという面は否定できない。職業高校など多様なコースを用意した国の思考とはズレてしまい、それが継続してきたのである。資本主義社会における人生選択としては、誰もが学歴や偏差値で競争するのは異常であり、今般の教育改革の方向性は、それをノーマルな姿に戻そうとするものと言える。

### ②三十代の親が育った教育環境

子どもとの接し方を悩む親に三十代の人が多い。この原因は彼らの思春期における教育環境が大きいと考えられる。

高校進学率は七〇年代中ごろに九五%を突破したが、この世代は、中学生・高校生だった七〇年代から八〇年代に、僅かな偏差値の違いが人生を左右するかのようなプレッシャーをかけ続けられた最初の世代である。偏差値のレールに乗れなかった場合の不全感やプレッシャーに対する意識が当時の校内暴力につながった可能性が考えられる。さらに、これへの対応がいわゆる管理強化だったため、当時、中学・高校生でいた現在の三十代の多くの親たちは、被教育体験がネガティブなものになっている。そして、親になっても、自分の経験以外にイメージすることが難しく、結局、親たちは必ずしも共感していないやり方で自分の子どもを育てざるをえず、再び自己不全に陥ってしまうという悪循環・閉塞状況にあるケースが多いのではないかと考えられる。

### ③人間が持つ自然の欲求が通りにくい現代社会

都市化された社会は便利だが、同時に、そ

1 教育問題の社会的背景  
2 実り豊かな教育改革を実現するために  
3 国の教育改革への評価・選択の自由に加え、安心できる身近な学校を  
4 今後の展望・生きることはおもしろいという社会を

注 この稿は、平成十一年十月二十日に行われた汐見稔幸氏へのインタビューを基に、企画局調査課が、編集・構成したものである。

■汐見稔幸（しおみ としゆき）  
東京大学教育学研究科助教授  
専門は、教育学、教育人間学  
平成九年から文部省生涯学習審議会特別委員  
著書に「子育て 愛があれば大丈夫」、「地球時代の子どもと教育」など

の便利さを維持するために、例えば道の真中でしゃがんでみたい、大声で話し合ってみたい等の欲求は抑制せざるを得ない。

また、社会生活をするうえでの義務感とどう折り合わせるかのストレスも相当に多い。だらしくなくしたい、自分のペースを通じたいという本来の欲求があるのに、それを受け止めてくれず、あまりにお行儀の良い社会や空間と接し続けていると人間は疲れてしまう。

このように、現代社会は精神的にはいろいろな面でプレッシャーの強い社会であり、そこから開放されたい心理が強まっていると考えられる。

そのために、都市づくり等においては、空間心理学的な観点から徹底的に検討する必要があるとも感じている。

## 2 実り豊かな教育改革を実現するために

「子どもの人生選択のための教育的なシステムの確立」と、「親に対するケア」との二つの取組みが必要である。さらに、地域や社会の変化も求められる。

### ① 子どもの人生選択のための教育的なシステムの確立

#### ア 前提としての学力のあり方

日本ではまさか起こるまいと思われていたレベルの原発事故が発生したことはまだ記憶に新しい。プロとしての労働者意識の崩壊に、日本の将来を憂慮し、根本的な立て直しの必要性を痛感した。この遠因も学歴や偏差値に

よって画一的かつ大量に言わばサラリーマン志向の人材を育成してきたことが大きい。このシステムで育成された人材は、言われたことを器用にこなす能力には優れているが、自分は何をしたいかの意識が希薄で、仕事へのこだわりもあまり持たない。かつては、どうせ作るならきっちりしたもの、さらにいつかは外国より良い物を作ろうという、日常生活の中にあつた一種の職人的な日本の文化と言ってもよいものが、こだわりや気概を持った労働者を多く育て、その人材が他国に成し得ないペースでの日本の近代化を底辺で支えた。このような人材の減少と意識の低下が、日本の今の国力の弱さにつながっている。

従って今後の当面の教育では、ものづくりや共同でつくるというような機会を拡大し、たんねんに、ていねいにつくることの面白さを存分に体験させることが重視されねばならない。例えば、算数の計算問題をさせることの意味は、計算機が日常化しているなかでは、あまり子ども自身の欲求とはならないが、計算の面白さやそれを発見した意味を再認識させることで、きちんと律儀に行うことの大切さ、そういう精神を定着させることに見出すべきである。また、〇〇について調べる課題を出すとしたら、時間的な余裕は十分に与える。にもかかわらず、いい加減な報告をした者には、厳しい評価をし、真面目に細かい点までこだわって調査した者を大いに評価していく指導方法を定着させることが考えられる。これらの積み重ねが、高学年になった時に、より大きな問題——たとえば環境問題などへの本物の探求心を育てていく基盤とな

っていくはずである。

### ① 本物性の志向

これからの学校が目指すことのキーワードの一つは本物性ではないかと考えている。本物とは、面倒でも人間の手づくりの良さを味わわせてくれるもの、人と人が本心で結びつくことを励ましてくれるもの、自然のありがたさを体感させてくれるもの、価値あるものへの憧れを育ててくれるものなどである。収入、地位、名誉などより、本物に憧れ、それを探究する心を創り出す教養や学力をどう養成するかを必死になつて模索する観点を早急に持たないと、日本はもうだめだというくらいの危機感を持つべきである。本物性を志すには、子どもたちに前述した精神とか身体を備えさせたうえで、自分のやりたい世界を探し出させる必要がある。学校はそこまでの指導や支援を担うのである。例えば、地元の中小企業に生徒を派遣したり、大工さんでの実習も単位として認めるくらいの柔軟さを持ったシステムを作り、職人的な本物志向の面白さを体験させてやれば、日本の社会にも新しい可能性が出てくると思う。アメリカで盛んなベンチャー支援は投資家を中心に行われているが、日本では、子どもたちの可能性に対して学校がその役割を果たす、という発想はできないだろうか。

### ② 親へのケアと親の「自分探し」の場を作る

子どもにどのような人生を選択させるか考えるのは親の務めである。しかし、親の経験や価値観を押し付けてしまつては、子どもを

うまく生かすことはできない。子どもの適性や職業の多様性を親自身がしっかりわきまえて、多様な人生のイメージを親自身が持てるかどうか子育てを楽にする。

親に、年功序列や終身雇用制の崩壊など社会の変化を説明し、自分の経験や価値観の転換を促すと、理屈では理解できても、心から納得するにはまだギャップがある。そのギャップを解消させるのが、親自身の「自分探し」である。「自分探し」とは、親が自分で自分を作り直すことも言える。こうすることで安心感を得て、自分がこだわっていた殻とか枠を自分で崩せる可能性が出てくる。「子育て支援」というとらえ方から、親が子どもと一緒に育ちあう・親が自分を育てることへの支援、親自身が救われる感覚を持てるような方向へ転換すべきである。

例えば、幼稚園や小学校の空き教室を利用した親の愚痴こぼしのたまり場作り、そこでいろいろながケア、フォローしてくれる仕組み作り、親の駆け込み的な相談に保母や教員が対応する制度などは、前述した主に三十代の親へのケアばかりでなく、子育ての仕方がわからずに、徒に神経質になったり、子どもにも過干渉になって困難を起こしている親全般への対策としても効果的だと考えられる。このような、保育園も幼稚園も学校も地域も親と一緒に育てるといふような、社会全体を子育てに優しいシステムに構築しなおすことが急務である。

### ③ 子育てに優しい社会の実現

先に述べたように、現代社会は多様性に富

み、個人の適性にびつたりのものを探すのはたいへんな時間がかかるし、一生費やしても見つからない可能性がある。従って、人生の選択を変えたり、何回か職業を変えることも必然化する。社会に求められる優しさの対して、選択の過程で模索する親や子どもに對して、恥ずかしさを感じてしまうように扱わず、多様な選択や価値観を鷹揚に認めるような優しさである。

もう一つは、地域で子どもを育てていこうという積極的な発想を持つ優しさである。学校の流動化という開放性を高め、学校評議員制度などの学校運営に、塾関係者や商店・企業などを含め、地域の方々にもっと参加してもらい議論するようにしてはどうか。特に、地域の中小企業との連携強化に期待したい。地元の企業に生徒を派遣する例を述べたのは、子どもたちに自分のやりたいことを見つけさせたり、本物性に目覚めさせるうえで、中小企業の多様性、切磋琢磨する高度な技術力などに触れさせることが、たいへん貴重な体験の機会になると思うからである。論点は若干それるが、そのような観点からも二十一世紀が中小企業の世紀になるように、中小企業を育成する必要がある。

このような仕組みを円滑に機能させるためには、組織と組織、個人と個人の意見をうまく翻訳しながら同時にコーディネートしていくコーディネーターが必要である。学校をもっと面白くする、良くする、さらに教育全体を変えていくという見通しと、そのためには、例えば誰にどう働きかけて何かを始めてみるといったプロシードユア(手続き)がわかる、

ある意味では、経営と言える感覚を持てる人材である。学校の先生には、この手続きを見通していくことが苦手な人が多いように思う。当面は、地域でいろいろな運動をしている人と行政で地域に出て行こうとしている人が一緒に関わっていくしかないのではないかと。社会教育の職員でありながら、地域ボランティアやNPOにも関わっているという面白い人も出てきている。行政マンは、先ほどの手続きはある程度判るし、地域のことを総合的に公平に見るといふことに慣れているので、このような場面で十分活用できると思う。

### 3 国の教育改革への評価と選択の自由に加え、安心できる身近な学校を

全体的な方向性については評価できるが、疑問点もある。一つは、国民の意見や要望を調整するというスタンスを意識しすぎているのではないか。その視点も必要だが、そればかりではなく、例えば、環境問題など公共的な目的への対応については、当面の利害から超越した百年くらい先を見たような施策を打ち出す必要があると考える。別の言い方をすると、市場的な自由が増しても、そのことで生じるリスクが社会をマイナスの方向におち入らせないように、あらかじめ一定の社会的保障をしていくことの大切さが十分に議論されていない気がする。

同じことであるが、市場原理的な自由主義が過剰に思われる。品川区の学校選択制については、文部省も全面的に賛成していなかったものが、なぜ認められたのか詳細

※教育改革については、「教育改革とその変革の視点」(本書6頁～9頁)を参照してください。

は不明である。親の要望をきちんとリサーチして出したとも思われない。親の方は気に入らない担任を変えてもらおう制度の方を望んでいる。選択といってもあまりに広い分野に、資金力や情報収集力の差が直接利害に結びつくような仕組みを適用することは疑問である。

全く選択の余地が無いというのはもう許されないと思うが、最低限保証されるべき部分と付加的な部分との組み合わせがあり、それを公と私あるいは官と民がどう役割分担するかの検討があつて然るべきである。選択の原理に任せるにしても、最低限保証されるべき部分に関しては、不公平をなくす方法や選択に失敗した人へのフォローやケアが用意されて

いる必要がある。今は、選択肢を多く用意するよりも、自分の子どもがいる身近な学校がどこも安心でき、万一、それ以下になつた時には、必死の努力でそれをすぐに変えてくれるという保証を作るほうが、公共の論理に合っているのではないだろうか。

#### 4 今後の展望／生きることはおもしろいという社会を

社会を覆う漠然とした不安がある。無責任に発言できないが、この不安が、巨大なヒリズム、教育や子育ての場面で言えば、次の世代はもう子どもを産まなくなつて、早い時

期に子どもがいなくなつてしまふのではないか、というような心理を作る可能性がある。そういう選択をするのか、それともやはり生きることは、意外とおもしろいという社会を作る方向に変わっていくのか、五分五分の岐路にあるのではないだろうか。後者の方向に向かうように積極的に関わる人たちがたくさん出てくるのが大切である。その期待を常に持ちながら、こうやればなんとかなるじゃないかという種のある種を語り続けていきたいと考えている。

△編集・構成 企画局調査課▽